

父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連

中道 圭人¹ 中澤 潤²

所属 ¹千葉大学大学院教育学研究科 ²千葉大学教育学部

Maternal / paternal childrearing style and young children's aggressive behavior

Keito NAKAMICHI¹ Jun NAKAZAWA²

¹Graduate School of Education, Chiba University ²Faculty of Education, Chiba University

This research examined the relationships between paternal/maternal authoritative, authoritarian, and permissive childrearing styles (based on the responsibility and control childrearing dimensions of Baumrind), and reactive and proactive aggressive behavior of their young children(N=59, aged 4 - 6 years). For reactive aggression, there were no differences among paternal/maternal childrearing types. For proactive aggression, authoritarian fathers have more aggressive young children than both authoritative and permissive fathers. If one or both of the parents were authoritarian, they tend to have more proactive aggressive children than both parents were authoritative. These results suggested that parents' authoritarian childrearing style promote proactive aggressive behavior in their young children.

キーワード：父親・母親の養育態度(maternal/paternal childrearing style), バウムリンド(Baumrind), 支配的・報復的攻撃行動(proactive/reactive aggressive behavior), 母親の就労(working mother), 幼児(young children)

Baumrind(1967)は母親の子どもに対する考え方や直接的な接し方を包括した養育態度を重視し、それを構成する次元として応答性、統制の二次元を用いた。応答性は母親と子どものコミュニケーションと養育から成り、「子どもの意図・欲求に気付き、愛情のある言語や身体的表現を用いて、子どもの意図をできる限り充足させようとする行動」、統制は養育上の統制と母親の成熟要求から成り、「子どもの意志とは関係なく、母親が子どもにとって良いと思う行動を決定し、それを強制する行動」と定義される。

Baumrind(1967)は観察やインタビューにより測定した応答性と統制の2次元の得点の高低により、母親の養育態度を権威的(Authoritativeness)、権威主義的(Authoritarian)、許容的(Permissiveness)の3つに分類した(表1)。

表1 養育態度の分類

	統 制	応答性
権威的 態度	高	高
権威主義的 態度	高	低
許容的 態度	低	高

親の養育態度と子どもの社会的行動の関係を検討した研究は多い。例えば戸田(1998)は、Baumrind(1967)に基づく母親の権威的養育態度、権威主義的養育態度、許容的養育態度それぞれの得点と自分の子どもの攻撃性についての母親の認知との関連を検討したところ、権威主義的養育態度が子どもの攻撃行動についての認知と負の相関を持ち、権威主義的養育態度の高い母親は子どもの

攻撃性が低いと見ていた。

この戸田(1998)では、3つの養育態度のタイプがそれぞれ測定されており、Baumrind(1967)のように応答性・統制という2つの次元の高低に基づいて養育態度のタイプを分類したわけではない。

そこで本研究では、Baumrind(1967)と同様、応答性、統制という二次元上の高低により分類した親の養育態度のタイプと攻撃行動との関連について検討する。

従来の親子関係の研究は子ども-母親、子ども-父親といった2者の直接的な関係だけに焦点をあてているものが多し。しかし、家族という単位で生活している以上、親のどちらか一方のみが子どもに影響しているわけではない。父親、母親がしつけなどの役割を相補的に行っている可能性もあり、両親や家族を総合的に見て、子どもへの影響を考える必要がある。

父親、母親二人の養育態度と子どもの社会的行動との関連を検討した研究は少ないが、例えば奥田(1996)は、父親と母親の養育態度(抑制的の態度、教示・指導的の態度、支持的の態度、受容的の態度)を合わせてクラスター分析を行うことにより、両親の養育態度パターンという新たな合成変数を作り、幼稚園児の自律性との関連を検討している。その結果、両親がともに受容的な養育態度で育った子どもは、両親がともに教示・指導的な養育態度の子どもや母親が受容的でない養育態度の子どもよりも自律性が高かった。

本研究では、父親、母親の養育態度をそれぞれ調査し、子どもの攻撃行動との関連を検討するとともに、両親の養育態度の組み合わせによる子どもの攻撃行動の違いを検討する。

また、近年、働く女性が増加してきている。母親の職

業の有無は、母親自身はもちろん、家族システムの中で父親や子どもに影響する可能性がある。例えば住田・藤井(1998)によると、妻が無職である父親よりも、妻が有職である父親のほうが「子どもの成長・発達に関する不安」が高かった。妻が無職の父親よりも妻が有職の父親の方が育児参加が多い事から、住田・藤井(1998)は、より主体的に関わる父親の方が、子どもに関心を持ち、子どもの実体をよく観察するので、成長や発達が遅れているのではないかといった不安や心配を抱くと考えている。

本研究では、母親の職業の有無が母親自身や父親の養育態度、子どもの攻撃行動に対してどのような影響を持つのかについて検討する。

攻撃行動は様々なタイプがある。例えば Dodge, & Coie (1987) は攻撃的行動を支配的攻撃行動(自分が攻撃行動のイニシアチブをとる行動)と報復的攻撃行動(他の仲間からの攻撃にやり返す行動)に分類した。支配的攻撃行動は相手の行動に関係なく行う能動的な行動であるので、子どもの意思に関係なく行う親の統制に類似している。一方、報復的攻撃行動は相手の行動に対する行動という受動的な行動であるので、相手の働きかけに対してどのように行動するかという親の応答性に類似している。このことから、親の応答性・統制がこの2つの攻撃行動に関連していると考え、本研究ではこの2つの攻撃行動を用いる。

本研究では以下の仮説を立てた。

仮説1: 権威主義的養育態度、および許容的養育態度をとる父親、母親の子どもは、権威主義的養育態度をとる親の子どもよりも攻撃的行動が多い。

権威主義的養育態度は応答的な態度をとり、言語的・民主的なやり取りを用い、愛情をうまく正の強化とし、しつけなどの統制をより効果的に用いることができる。

それに対し、権威主義的養育態度では権威主義的養育態度と同程度に統制的であるが、応答的な態度をとらないため、一方的な力中心の養育態度になってしまう。そのため、子どもは欲求不満を抱いたり、仲間との関わりの中でほかの子どもに対して一方的な力中心による主張をしてしまうため、攻撃的行動が多くなると考えられる。

許容的態度では、権威主義的養育態度と同程度に応答的な態度をしている場合もあるが、権威主義的養育態度と違い統制が低いので、ある状況で、どのように振舞うべきなのかという、社会的に望ましい行動を親は示したり、しつける事が少ない。そのため子どもは、ある状況で自分がどのように振舞うのか、自分の欲求をどのように解消すればよいのかが分からないため、社会的に望ましくない行動をとってしまい、権威主義的養育態度よりも子どもの攻撃的行動が多くなると予測される。

仮説2: 両親がともに権威主義的養育態度、もしくは許容的養育態度である家族の子どもは最も攻撃的行動が多く、両親がともに権威主義的養育態度である家族の子どもは最も攻撃的行動が少ない。

両親がともに権威主義的行動のみを行っていたり、許容的行動のみを行っている場合、子どもは欲求不満に陥ったり、適切な社会的行動のモデルをもてない。しかし、一方の親が子どもの欲求不満を解消するような許容

的養育態度を持ち、もう一方の親がしつけなどの統制を行うような権威主義的養育態度を持っていれば、お互いの態度を補い合う事ができる。また、一方の親が子どもに応答し、かつ、統制を行なう権威主義的養育態度を持ち、もう一方の親が権威主義的養育態度や許容的養育態度を持つ場合、権威主義的養育態度の親が子どもの欲求不満を軽減したり、しつけなどをきちんと行なう事ができる。

このことから、両親がともに権威主義的養育態度、もしくは許容的養育態度である子どもが最も攻撃的行動は多く、続いて両親のどちらか一方が異なる養育態度である家族の子ども、そして両親がともに権威主義的養育態度である家族の子どもが最も攻撃的行動は少ないと予測される。

なお職業の有無については、この2つの仮説にどのように影響を及ぼしているのかを検討するとともに、仮説は立てない。

[方法]

(1) 親の養育態度調査

対象者; 東京都内の保育園・幼稚園に通う幼児の両親。父親の回答者172名、平均年齢は37.2歳(標準偏差4.44, 範囲23歳~50歳)、母親の回答者202名、平均年齢は35.4歳(標準偏差4.77, 範囲22歳~64歳)であった。職業に関して、父親は有職(常勤)162名、不明10名であり、母親は、有職(常勤54名、パートタイム28名)82名、無職(専業主婦)110名、不明10名であった。

手続き; 両親の養育態度に関する質問紙は、園の担当教諭を通して配布し、父親、母親に直接記入してもらった。

材料; 親の養育態度に関する22項目。Robinson, Mandlco, Olson, & Hart(1995)が作成した、親の養育行動を測定する項目を基に、独自に作成した。子どもに対する統制に関する項目11項目、子どもに対する応答性に関する項目11項目、計22項目からなる。回答は「1. ぜんぜんあてはまらない」、「2. あまりあてはまらない」、「3. だいたいあてはまる」、「4. ぴったりあてはまる」の4段階評定で求めた。

(2) 幼児の攻撃行動調査

対象者; 男児31名、女児28名、合計59名であった。平均月齢は62.59ヶ月(標準偏差9.53, 範囲43~77ヶ月)であった。保育園に通う幼児は22名、幼稚園に通う幼児は37名であった。

手続き; 養育態度調査の対象者の中から、保育園の場合、母親が常勤、幼稚園の場合、母親が専業主婦であり、かつ、両親の回答・記名に欠損がない家庭を選出した。選出した家庭の幼児を対象として、攻撃的行動に関する調査用紙を、担当教諭に配布した。対象児の担当教諭に、幼児の攻撃的行動について評定を行なってもらった。

材料; 幼児の攻撃行動に関する40項目。McNeilly, Hart, Robinson, Nelson, & Olsen(1996)の作成した、幼児の攻撃的行動に関する項目40項目を使用した。攻撃的行動40

項目は、支配的攻撃行動（自分が攻撃行動のイニシアチブをとる行動）-20項目、報復的攻撃行動（他の仲間からいじめられたり、意地悪されたらやり返す行動）-20項目で構成されている。回答は「1.まったく見られない」、「2.時々見られる」、「3.よく見られる」の3段階評定で求めた。

[結果]

(1) 養育態度の因子分析

母親、父親のデータを一括し、養育態度に関する22項目について得点化し、主因子法による因子分析を行ない、バリマックス回転により2因子を抽出した。因子負荷量

が.40未満の6項目（項目5：子どもが今までできなかった事ができて喜んでいる時、「すごいね」などと言葉をかけて喜び合う、項目8：食事の時などに、子どもの園での話を聞くことは無い、項目10：子どもが自分で何かを作っている時、あなたは子どもの話を聞いたりして、子どもが「やって」と言うような時だけ手を貸す、項目16：何故か分からないが子どもが泣き止まない時、無理にでも泣き止ませる、項目17：子どもがテレビを見過ぎないように、時間を親が決めている、項目18：ピアノなど子どもに何か教える時、子どもがきちんとできるようになるまで教える）を削除し、残り16項目に対して再度、同様の因子分析を行った。バリマックス回転後の各項目の因子負荷量を表2に示す。

表2 親の養育態度 バリマックス回転後の因子負荷量

項目内容	応答性	統制	
1. 子どもが一人で遊んでいて、退屈そうだなと思った時、加わって一緒に遊ぶ。	.744	-.009	
3. 子どもを抱きしめたり、やさしい言葉をかけて愛情を示している。	.653	.178	
4. 子どもがイライラしていると思った時、「どうしたの」と聞いてみる。	.645	.160	
9. あなたが家にいる時、ボール遊びやゲームなど、子どもと一緒に過ごす時間を持っている。	.595	-.008	
2. どこかに出かけて、子どもが疲れているなど感じた時、休んだり、子どもを抱っこする。	.581	.132	
6. あなたが忙しい時、子どもが遊びたがっても、遊ぶのを後回しにしてしまう。	-.442	.123	
7. 子どもが間違っただけの行動をした時、どうしてその行動をしたのか理由を聞き、どうしたらよかったのかを話し合う。	.420	.364	
11. 家族で遊びに行く時、親の都合だけでなく、できる限り子どもの行きたい所を取り入れる。	.400	-.001	
22. 子どもがあなたと決めた約束を守らない時、その約束をもう一度教える。	.192	.640	
21. 図書館や映画館など静かにしなければならない場所では、子どもを静かにさせる。	.110	.620	
14. 子どもが自分のやるべき事をやらない時、「やりなさい」と言う。	-.174	.605	
12. 買物に行って玩具を買う予定が無い時に、子どもが玩具を欲しいと言って売り場から動かなくても、玩具は買わない。	-.008	.529	
15. 子どもが友達と遊んでいて、友達が使っている玩具を無理やり取ってしまった時、それを返させる。	-.003	.510	
19. 子どもが寝る時間になっても、遊んでいて寝ない時、そのままにしておく。	-.127	-.503	
13. 子どもが自分のやっている事が上手いかず騒いでいる時、静かにさせる。	-.008	.478	
20. 子どもがあなたに対して悪い言葉遣い（「バカ」、「アホ」etc）をしたとしても、気にしない。	-.006	-.449	
	固有値	2.730	2.620
	寄与率	17.070	16.360
	累積寄与率	17.070	33.430

第一因子は8項目からなり、「子どもの意図・欲求に気付き、愛情のある言語的・身体的表現を用いて、子どもの意図をできる限り充足させようとする行動」と定義していた、応答性に対応する項目からなるので、これを「応答性」因子と命名した。 α 係数は.69であった。

第二因子は8項目からなり、「子どもの意志とは関係

なく、親が子どもにとって良いと思う行動を決定し、それを強制する行動」と定義していた、統制に対応する項目からなるので、これを「統制」因子と命名した。 α 係数は.76であった。

(2) 父親と母親の比較

2つの因子を構成する16項目について「ぜんぜんあてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「だいたいあてはまる」、「ぴったりあてはまる」の順に1から4点を与え、得点化した。ただし、項目6・19・20は逆転項目のため、4から1の順に与え、得点化した。各因子を構成する項目の合計得点を、その因子に含まれる項目数で割った得点を因子の得点とした。統制因子および応答性因子それぞれの平均得点を図1に示す。父親、母親の因子の得点では、統制得点に差が見られ ($t_{(373)} = 3.04, p < .05$)、父親は、母親に較べて、しつけなどの統制的な行動が低かった。

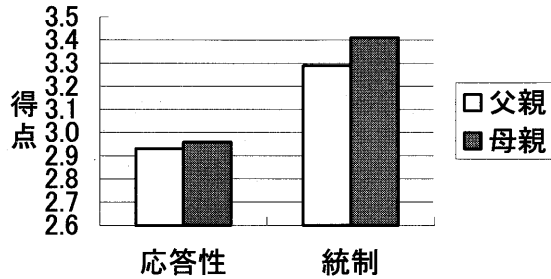


図1 父親・母親の応答性・統制の平均得点

(3) 養育態度の分類

養育態度を、応答性因子の得点、統制因子の得点それぞれの高低で分類した。応答性に関しては、因子の平均得点(2.95点)を高低分類の基準とした。統制に関しては、父親と母親では、因子の得点に差が見られたため、それぞれの平均得点(父親3.30点、母親3.40点)を高低分類の基準とした。統制因子が平均点以上の被験者のうち、応答性因子の平均得点以上の被験者を「権威的養育態度」、応答性因子の平均得点以下の被験者を「権威主義的養育態度」とした。また統制因子の平均得点以下の被験者を「許容的養育態度」とした。

その結果、101名(父親46名、母親55名)が権威的養育態度、81名(父親38名、母親43名)が権威主義的養育態度、193名(父親88名、母親105名)が許容的養育態度と分類された。

父親と母親の各養育態度の人数について、 χ^2 検定を行なったが有意差は見られなかった ($\chi^2_{(2)} = .45, n.s.$)。また、職業が不明である20名を除き、残りの父親、母親の養育態度の母親の職業の有無別の人数を表3に示す。

表3 母親の職業の有無による両親の養育態度別の人数

	父親			合計	母親			合計
	権威的養育態度	権威主義的養育態度	許容的養育態度		権威的養育態度	権威主義的養育態度	許容的養育態度	
有職	13	9	44	66	21	17	46	84
無職	23	19	53	95	29	22	59	110
合計	36	28	97	161	50	39	105	194

χ^2 検定により分析したところ、両親ともに有意差は見られず、養育態度の割合は母親の職業の有無によって変わらなかった(父親： $\chi^2_{(2)} = 2.03, n.s.$; 母親： $\chi^2_{(2)} = 2.52, n.s.$)。

(4) 父親の養育態度別の幼児の攻撃行動

幼児の攻撃的行動は2種類の攻撃的行動からなり、支配的攻撃行動(20項目)、報復的攻撃行動(20項目)で構成されている。それぞれの項目に「まったく見られない」、「時々見られる」、「よく見られる」の順に1~3点を与え得点化した。支配的攻撃行動・報復的攻撃行動に関する項目の合計点を、それぞれの項目数(20項目)で割った数を、支配的攻撃行動得点・報復的攻撃行動得点とした。被験者全体の得点の平均は支配的攻撃行動1.23点、報復的攻撃行動1.40点であり、攻撃行動の評定は比較的低い。

父親の養育態度群の母親の就労の有無別の各攻撃的行動得点を表4に示す。父親の養育態度×母親の就労の有無の2要因の分散分析を行った。分散分析によると、支配的攻撃行動では養育態度の群 ($F_{(2,53)} = .92, n.s.$) および母親の就労の有無 ($F_{(1,53)} = .18, n.s.$) による主効果はいずれも有意ではなかった。またこれらの交互作用も有意ではなかった ($F_{(2,53)} = 1.41, n.s.$)。

表4 父親の養育態度別の幼児の攻撃的行動得点

		支配的攻撃行動			報復的攻撃行動			人数		
		有職群	無職群	合計	有職群	無職群	合計	有職群	無職群	合計
権威的	M	1.36	1.09	1.16	1.49	1.33	1.37	4	10	14
	SD	.21	.11	.19	.06	.19	.13			
権威主義的	M	1.37	1.21	1.25	1.53	1.49	1.50	3	8	11
	SD	.29	.23	.24	.08	.08	.01			
許容的	M	1.24	1.21	1.25	1.32	1.43	1.38	15	19	34
	SD	.20	.21	.21	.03	.13	.14			
合計	M	1.26	1.21	1.23	1.38	1.40	1.40	22	37	59
	SD	.22	.21	.21	.14	.13	.13			

満点(3)

一方、報復的攻撃行動では父親の養育態度による有意な主効果 ($F_{(2,53)} = 4.71, p < .05$) が見られた。Tukey法を用いた多重比較によると権威主義的養育態度群は、権威的養育態度群、許容的養育態度群より高かった ($p < .05$)。権威的養育態度群と許容的養育態度群の間に差はなかった。母親の就労の有無による主効果は有意ではなかった ($F_{(1,53)} = .70, n.s.$)。これらの交互作用は有意であった ($F_{(2,53)} = 6.15, p < .01$)。母親の就労の有無別に行なった父親の養育態度群の分散分析によると、母親が有職の場合、父親の養育態度群による有意な主効果が見られた ($F_{(2,19)} = 5.96, p < .05$)。Tukey法を用いた多重比較によると権威主義的養育態度群は許容的養育態度群よりも高く ($p < .05$)、また、権威的養育態度群は許容的養育態度群よりも高い傾向が見られた ($p < .10$)。権威主義的養育態度群と権威的養育態度群の間に差はなかった。

母親が無職群である場合、同様に父親の養育態度群による有意な主効果が見られた ($F_{(2,34)} = 5.02, p < .05$)。Tukey法を用いた多重比較によると権威主義的養育態度群は権威的養育態度群よりも高く ($p < .05$)、許容的養育態度群は権威的養育態度群よりも高い傾向が見られた ($p < .10$)。権威主義的養育態度群と許容的養育態度群の間に差はなかった。

(5) 母親の養育態度別の幼児の攻撃行動

母親の養育態度群の母親の就労の有無別の各攻撃的行動得点を表5に示す。母親の養育態度×母親の就労の有無の2要因の分散分析を行った。支配的攻撃行動では養育態度の群 ($F_{(2,53)} = 2.35, n.s.$)、および母親の就労の有無 ($F_{(1,53)} = .20, n.s.$)による主効果はいずれも有意ではなかった。またこれらの交互作用も有意ではなかった ($F_{(2,53)} = 1.27, n.s.$)。

報復的攻撃行動においても、養育態度の群 ($F_{(2,53)} = 1.23, n.s.$)、および母親の就労の有無 ($F_{(1,53)} = .42, n.s.$)による主効果はいずれも有意ではなかった。またこれらの交互作用も有意ではなかった ($F_{(2,53)} = .05, n.s.$)。

表5 母親の養育態度別の攻撃行動得点

		支配的攻撃行動			報復的攻撃行動			人数		
		有職	無職	計	有職	無職	計	有職	無職	計
権威的	M	1.13	1.14	1.13	1.42	1.34	1.36	3	10	13
	SD	.10	.15	.13	.14	.12	.13			
権威主義的	M	1.23	1.18	1.20	1.40	1.49	1.44	6	5	11
	SD	.17	.29	.22	.09	.11	.11			
許容的	M	1.31	1.26	1.28	1.37	1.43	1.41	13	22	35
	SD	.25	.21	.22	.17	.12	.14			
合計	M	1.26	1.21	1.23	1.38	1.40	1.40	22	37	59
	SD	.22	.21	.21	.14	.13	.13			

満点(3)

(6) 養育態度の組み合わせ別の各攻撃行動の比較

幼児の攻撃的行動への両親の影響を見るため、父親・母親の養育態度の組み合わせ別の、幼児の攻撃的行動得点の差について検討した。養育態度の組み合わせは、両親が2人とも同じ養育態度の場合(権威的・権威的、権威主義的・権威主義的、許容的・許容的)、もしくは両親がそれぞれ異なる養育態度の場合(権威的・権威主義的、権威的・許容的、権威主義的・許容的)の6つの群に分類した(表6)。

母親が有職の場合、権威的・権威的、権威的・権威主義的は1組もいなかった。そこで残りの4群で一要因の分散分析を行った。支配的攻撃行動では有意な主効果は見られなかった ($F_{(3,18)} = .10, n.s.$)。報復的攻撃行動では群の主効果に有意な傾向が見られた ($F_{(3,18)} = 3.35, p < .10$)。権威主義的・権威主義的(1.45)が最も高く、続いて権威主義的・許容的(1.44)、権威的・許容的(1.36)の順で、許容的・許容的(1.24)が最も低かったが、Tukey法を用いた多重比較によると、4群に有意な差

は見られなかった。

母親が無職である場合、6群間の比較を一要因の分散分析で行った。支配的攻撃行動では有意な主効果は見られなかった ($F_{(5,31)} = 1.60, n.s.$)。報復的攻撃行動では群の主効果に有意な傾向が見られた ($F_{(5,31)} = 2.48, p < .10$)。権威主義的・権威主義的(1.58)が最も高く、続いて権威主義的・許容的(1.46)、許容的・許容的(1.44)、権威主義的・権威的(1.43)、許容的・権威的(1.37)の順で、権威的・権威的(1.30)がもっとも低かった。Tukey法を用いた多重比較によると、権威主義的・権威主義的は権威的・権威的よりも高い傾向が見られた ($p < .10$)。

表6 両親の養育態度の組み合わせと幼児の攻撃的行動

		支配的攻撃行動			報復的攻撃行動			人数		
		有職	無職	計	有職	無職	計	有職	無職	計
権威的	M	1.10	1.10		1.30	1.30		0	6	6
	SD	.12	.12		.13	.13				
権威主義的・権威主義的	M	1.20	1.38	1.32	1.45	1.58	1.53	2	2	4
	SD	.08	.46	.32	.10	.11	.10			
許容的	M	1.24	1.33	1.30	1.24	1.44	1.37	6	14	20
	SD	.25	.23	.24	.09	.14	.16			
権威的・権威主義的	M	1.03	1.03		1.43	1.43		0	2	2
	SD	.04	.003		.11	.11				
権威的・許容的	M	1.26	1.16	1.22	1.46	1.37	1.42	7	6	13
	SD	.20	.16	.18	.10	.09	.10			
権威主義的・許容的	M	1.29	1.15	1.22	1.44	1.46	1.45	7	7	14
	SD	.24	.16	.19	.12	.06	.01			
合計	M	1.26	1.21	1.23	1.38	1.42	1.40	22	37	59
	SD	.22	.21	.21	.14	.13	.13			

満点(3)

[考察]

1. 仮説の検証

仮説1

支配的攻撃行動では、父親、母親の3つの養育態度で有意差が見られなかった。支配的攻撃行動に関して、仮説1は棄却された。

McNeilly, Hart, Robinson, Nelson, & Olson (1996)は支配的攻撃行動は、子どもが自らの主張を実現しようとする時に、自己主張のための適切な社会的行動を用いることができないために出現するとしている。しかし日本の場合、柏木(1988)は、親の子どもに対する発達期待において、自己主張より自己抑制が重視され、子どもの自己抑制も自己主張より有意に強く、日本の子どもの自己主張の発達は十分ではない事を示している。このような自己抑制の重視が、養育態度に関わらず子どもの支

配的攻撃行動そのものの出現を報復的攻撃行動より低くし ($t_{(58)}=3.12, p<.05$), そのため群による差が見られなかったであろう。

報復的攻撃行動では、父親全体、母親有職群の父親、母親無職群の父親のそれぞれで権威主義的養育態度群は権威的養育態度群に比べ高かった。しかし、許容的養育態度は権威的養育態度と大きく差はなかった。このことから、仮説1については、報復的攻撃行動において権威主義的養育態度で高いという点について支持された。

McNeilly, Hart, Robinson, Nelson, & Olson (1996) は報復的攻撃行動は、子どもが相手の子どもの行動を敵意のある行動とみなし、相手に対して攻撃行動を行ってしまったり、他の子どもの働きかけに対して行動を行うときに、相手に対して適切な社会的行動を用いることができないために出現するとしている。権威主義的養育態度をとる親は、子どもからの働きかけに対してあまり応答的に行動せず、子どもの行動を一方向的に統制する行動を行う。そのため権威主義的養育態度をとる親の子どもは、他の子どもの自分への働きかけに対する応答的な行動のモデルを獲得することができず、報復的攻撃行動が多くなったのであろう。

許容的養育態度の親の子どもは報復的攻撃行動は多くはなく、仮説1と異なる結果が出た。日本における許容は、まず子どもの意思を尊重する子ども中心であり、子どもは安心し満足して、充足した安定を得られると考えられる。そのため許容的養育態度をとる親の子どもは、親の子どもに対して愛情を持って接するような応答的な行動を受けることにより、他者の行動を敵意のあるものとみなすことが少なくなり、報復的攻撃行動が少なくなったのであろう。

母親全体、有職の母親、無職の母親のそれぞれの養育態度で差は無かった。戸田 (1998) は母親の養育態度による子どもの攻撃行動に差異があることを報告しているが、その結果と本研究との結果は異なる。戸田 (1998) は3つの養育態度をそれぞれ独立に測定しており、その尺度では、権威的養育態度の項目に応答的な行動が多く、権威主義的養育態度の項目に統制的な行動が多い。本研究では応答性、統制の2次元の高低で養育態度を分類している。このような養育態度の測定法による違いが影響しているのかもしれない。

仮説2

支配的攻撃行動では養育態度の組み合わせによる有意差が見られなかった。

報復的攻撃行動では、養育態度の組み合わせ全体、母親無職群で、両親がともに権威主義的養育態度をとる家族の子どもは、攻撃行動が最も多く、両親がともに権威的養育態度である家族の子どもは、攻撃的行動が最も少ない傾向が見られ、仮説2の権威主義的養育態度と権威的養育態度の部分は支持された。また、両親の養育態度が異なる場合には、両親のどちらか一方が権威主義的養育態度をとっている場合、子どもの報復的攻撃行動は多くなる傾向が見られ、一方の親のみが権威主義的養育態度をとる場合でも、その影響は相対的に大きいことが明らかになった。

両親がともに許容的養育態度である家族の子どもは報復的攻撃行動が少なかったため、仮説2の許容的養育態度の部分は棄却された。こうした子どもは両親からの応答的な行動を受けており、他者の行動を敵意のあるものとして見なす事が少なく、欲求不満を抱くことも少ないためであろう。また奥田 (1996) によれば、両親が受容的な養育態度である子どもは自律性が高かった。両親が許容的養育態度をとる家族の子どもは自律性が確立してきており、自らの行動を規制できるようになり、攻撃行動が抑制されたことも考えられる。

Baumrind (1971) と同様、両親双方が権威的である場合が最も報復的攻撃行動は低く、応答性と統制のバランスがとれている事が重要であることを示した。

2. 妻の職業の有無による親の養育態度

子どもの報復的攻撃行動は、母親が有職である場合、許容的養育態度の父親で低いが、母親が無職の場合は権威的養育態度の父親で低かった。母親が働いている場合、父親が育児を補い、子どもと接する機会が多くなる。子どもに応答し遊びを行うような許容的な父親は、母親が仕事を持っていて、子どもがストレスを感じる事があっても、父親が許容的な養育態度である事で子どものストレスは相対的に低下し、報復的攻撃行動が抑制されたのだと考えられる。

母親が有職の場合、父母共に権威的養育態度である者は少なかった。両親の養育態度の組み合わせでは権威的・権威的、権威的・権威主義的といった組み合わせが無く、権威主義的・権威主義的も2組だけであり、一方の親が許容的養育態度である事が多かった (22組中14組)。妻が有職の場合、育児は母親だけでなく、父親、母親双方で行う事が多くなる。そのため育児の際、権威的養育態度に見られる応答的、統制的双方の役割を一人で担うのではなく、二人で役割を分担する事が多くなるか、あるいは双方とも許容的になることが相対的に多くなったと考えられる。

[文献]

- Baumrind, D. 1967 Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs*, 75, 43-88.
- Baumrind, D. 1971 Current patterns of parental authority. *Developmental Psychology Monographs*, 4(2, Pt. 2).
- Doge, K. A., & Coie, J. D. 1987 Social-information-processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 1146-1158.
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達：行動の自己制御機能を中心に 東京大学出版会。
- McNeilly, C., Hart, C., Robinson, C., Nelson, L. & Olson, S. 1996 Overt and relational aggression on the playground: Correspondence among different informants. *Journal of Research in Childhood Education*, 11, 47-67.

父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連

奥田 援史 1996 養育態度のタイプと幼児の自律性 滋賀大学教育学部紀要(教育科学), 46,1-7.

Robinson, C. C., Mundleco, B., Olsen, S., & Hart, C. 1995 Authoritative, authoritarian, and permissive parenting practices: Development of a new measure. *Psychological Reports*, 77,819-830.

住田正樹・藤井美保 1998 育児不安に関する研究—父親の場合— 九州大学大学院教育学研究紀要, 44,79-98.

戸田須恵子 1998 母親の養育スタイルと子供の攻撃行動に関する研究 北海道教育大学紀要, 1,49-62.